

ルソーの夢

——むすんでひらいて考——（その三）

海老沢 敏

三、小学唱歌《見わたせば》

前章において、《むすんでひらいてはルソー作曲か？》という問題について、現在まで論じられてきた主要点について紹介してみた。《むすんでひらいて研究史》については、私自身の研究発表をつけ加えておかなければなるまい。私自身のこの問題に関する関心は、およそルソー生誕二百五十年祝年の一九六二年（昭和三十七年）以前にさかのぼるものであるが、研究発表のかたちで

は、昭和四十九年（一九七四年）の音楽学会第二十五回全国大会（十月三日―四日、於同志社女子大学）で《結んでひらいて考》——ルソーとの関連において——と題して、口頭発表をおこない、さらに音楽学会関東支部第一〇七回定例会（第十九回東京音楽学会・音楽学会合同例会）で《明治唱歌《見わたせば》とルソー——明治初期洋楽移入に関する一考察——》をおなじく口頭で発表した。この要旨は《音楽学》（第二一卷第一号・昭和四〇年三月）に掲載されている。

拙稿は小学唱歌集初編に収められた《見渡せば》につけられた

伊沢修二ならびに遠藤宏の注釈の由来についてまずはじめにアプローチを試みているが、本稿でも、まず小学唱歌《見わたせば》から論じはじめることが妥当だろう。

《見わたせば》は〈文部省音楽取調掛編集〈唱歌集〉初編〉に



図版① 《小学唱歌集 初編》の
タイトル・ページ

収められて発表された。このいわゆる《小学唱歌集 初編》の初版のタイトル・ページには〈明治十四年十一月刊行〉と謳われている(図版①)。「小学唱歌集 初編」の編集刊行については、すでに幾多の研究結果が発表されているので、詳細はそうした文献にゆずることとし、^(注1)ここでは直接《見わたせば》に関係するデータだけを簡単に示しておこう。

(注1) 以下目ぼしいものを列挙するにとどめたい。

遠藤宏著『明治音楽史考』(有朋堂・昭和二十三年)

山住正巳著『唱歌教育成立過程の研究』(東京大学出版会・昭和四十二年)

伊沢修二著・山住正巳校注『洋楽事始(音楽取調成績申報書)』(平凡社〈東洋文庫183〉・昭和四十六年)

東京芸術大学音楽取調掛研究班編・浜町政雄・服部幸三監修『音楽教育成立への軌跡——音楽取調掛資料研究——』

(音楽之友社・昭和五十一年)

この《小学唱歌集》の編集をおこなったのは、明治十二年(一八七九年)の十月に設立され、伊沢修二が御用掛に任命された〈文部省音楽取調掛〉であった。当時、東京師範学校長の要職にあった伊沢修二(一八五一年—一九一八年)は御用掛兼職を命

じられたが、彼は明治八年（一八七五年）にアメリカ合衆国に留学し、翌九年にルーサー・ホワイティング・メイスン（一八二八年——一八九七年）なる音楽教育家を知ることによって、以前から関心をもっていた唱歌教育、音楽教育にいつそうつよい抱負を抱くにいたっていたのだ。伊沢の帰国は明治十一年（一八七八年）であったが、翌十二年（一八七九年）三月、音楽伝習所設置案が文部省で回案され、音楽の公教育についての第一歩が踏み出されたものである。伊沢はこうした音楽教育の推進をはかるために、ボストンから前記メイスンを招聘すべく努力し、この米國音楽教育家は明治十三年三月はじめにはるばる日本を訪れたのであった。

到着後のメイスンにとつてのさつそくの仕事は、「東京師範学校附属小学校及東京女子師範学校附属練習小学並ニ幼稚園生徒ニ来週〔四月第一週〕ヨリ唱歌教授」をおこなうことであつた（音楽教育成立への軌跡》一二ページより引用）。

こうした実際の唱歌教育活動とならんで、メイスンが二年間の在日中に果たした大きな役割が、『小学唱歌集』および『唱歌掛図』の編集作業であつた。もちろん、この仕事は、『音楽取調掛』がおこなつたものであつたが、その中心が伊沢でありメイスンであつたのである。

その編集作業は明治十三年（一八八〇年）から翌年にかけておこなわれ、明治十四年（一八八一年）十一月十五日には、掛図と唱歌集の出版版權届が提出され、さらに改正の仕事などをはさみ、翌明治十五年（一八八二年）四月に両者の初編が完成するにいたつたのだ。『小学唱歌集 初編』の冒頭には、明治十四年十一月という日付をもつ『音楽取調掛長 伊沢修二』の『緒言』が掲げられている。

その全文を以下引用してみよう。

「凡ソ教育ノ要ハ徳育智育体育ノ三者ニ在リ而シテ小学ニ在リテハ最モ宜ク徳性ヲ涵養スルヲ以テ要トスヘシ今夫レ音楽ノ物タル性情ニ本ツキ人心ヲ正シ風化ヲ助クルノ妙用アリ故ニ古ヨリ明君賢相特ニ之ヲ振興シ之ヲ家國ニ播サント欲セシ者和漢欧米ノ史冊歴々徴スヘシ曩ニ我政府ノ始テ学制ヲ頒ツニ方リテヤ已ニ唱歌ヲ普通学科中ニ掲ケテ一般必須科タルヲ示シ其教則綱領ヲ定ムルニ至テハ亦之ヲ小学各等科ニ加ヘテ其必ス学ハサル可ラサルヲ示セリ然シテ之ヲ学校ニ実施スルニ及ンテハ必ス歌曲其当ヲ得声音基正ヲ得テ能ク教育ノ真理ニ悖ラサルヲ要スレハ此レ其事タル固ヨリ容易ニ舉行スヘキニ非ス我省此ニ見ル所アリ客年特ニ音楽取調掛ヲ設ケ充ルニ本邦ノ学士音楽家等ヲ

以テシ且ツ遠ク米国有名ノ音楽教師ヲ聘シ百方討論悉シ本邦固有ノ音律ニ基ツキ彼長ヲ取り我短ヲ補ヒ以テ我学校ニ適用スヘキ者ヲ撰定セシム爾後諸員ノ協力ニ頼リ稍ヤク数曲ヲ得之ヲ東京師範学校及東京女子師範学校生徒并兩校附属小学生徒ニ施シテ其適否ヲ試ミ更ニ取捨選択シ得ル所ニ随テ之ヲ録シ遂ニ歌曲數十ノ多キニ至レリ爰ニ之ヲ割斷ニ付シ名ケテ小学唱歌集ト云是レ固ヨリ草創ニ属スルヲ以テ或ハ未タ完全ナラサル者アラント雖モ庶幾クハ亦我教育進歩ノ一助ニ資スルニ足ラント云爾

《見たせば》はその《小学唱歌集 初編》全三十三曲の《第十三》をなしているのである。ここでは譜例①および図版②として、《小学唱歌集 初編》の当該ページを紹介しておこう。(次頁参照)

すでに前回の研究史の中で触れたように、この《小学唱歌集 初編》には、作詞者、作曲者の名前は挙げられていない。これは《見渡せば》だけの問題ではなく、全部に亘ってそうなのである。《小学唱歌集 初編》ならびに《唱歌掛図 初編》が刊行されて、ひろく広められるに先立って、音楽取調掛は、こうした唱歌集編集の仕事と、唱歌集にもとづく実際の教育の仕方をひろく一

般に紹介するために、公開の《大演習》を催している。

「明治十五年一月三十日及び三十一日の両日、音楽取調の成績報告の爲め、大演習を昌平館に開き、本省卿輔以下諸官及び内外貴紳の臨場を牒講し、本掛伝習生、両師範学校及び学習院等の総生徒を会集し、諸楽演奏を挙行セリ」(《創置処務概略》、《洋楽事始》二九ページより引用)

第一日には、メイスンが「唱歌并に音楽進歩の情況を報告」(同右書三〇ページ)したあと、「東京師範学校附属小学生徒、唱歌掛図第十二曲及び単音唱歌七種を演」(三〇ページ)じたほか、なお、ピアノ独奏や重奏、小学校上級生による唱歌(単音ならびに複音唱歌)があり、さらに《本邦俗楽》の演奏もあった。第二日には、掛長 伊沢修二から音楽取調の現況報告があり、第一日同様さまざまな演奏がおこなわれたのであった。《創置処務概略》は最後に次のように述べて報告を終えている。

「抑々、該兩日は天氣晴朗にして、寒將に去て春將に来らんとするの好景に際し、本省卿輔巴下諸官は云うに及ばず、皇族、大臣、外国公使其他朝野の紳士、学校生徒親族朋友の臨場、実に意外に出て、満館立錫の地なきに至れり。蓋し和漢洋雅俗諸楽曲を一場に演奏せるは、本会を以て嚆矢とす。本会の執行は、音楽に係

第十四

♩

4/4

1 2

三つた ワかち 名た ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん ちんちん

ハチウ ナのゆ ぢぢぢ ぢぢぢ ぢぢぢ ぢぢぢ ぢぢぢ ぢぢぢ

ミウ ヤナ コキ ニコ ハキ ミキ チミ モチ セハ ニの

ハチ ルキ ノの ニに シシ キキ シシ ソゼ

♩

譜例① 《小学唱歌集 初編》 第13 《見わたせば》の楽譜

第十三 兄わとせを
一 兄わとせを。何をやまきと花梅。
こたまざり。みやこりそ。
みちもやう。まろ^{いさ}をぞ。
まほひえり。おろし^{いさ}て。
ふるあめり。そろりける。
二 みわとせは。やまべり。
をろへり。ふそりそ。
うもあつた。まみちえり。
あつた^{いさ}をぞ。あつてびえ。
おろし^{いさ}て。おろし^{いさ}て。
はろりける。

図版② 《小学唱歌集 初編》 第13 《見わたせば》の歌詞

る思想を社会に喚発し、尋で音楽会の興行等、陸續世に行わるるに至りしは、本会与りて力ありとす。」(同右書三一ページ)

第一日のプログラムを次に列記してみよう。

「午後第一時 諸員着坐

音楽取調掛助教及伝習人等奏楽

洋風管絃楽 二曲〔指揮役メーソン〕

大平曲 (各種管絃合奏)

ウェイルス国歌 (同)

音楽教師メーソン氏唱歌並音楽進歩ノ情況の報告

午後第一時半

東京師範学校附属小学上下等諸級生徒進入〔洋琴進行曲〕

上下等諸級生徒〔合百拾五名〕

唱歌掛図第一曲ヨリ第十二曲迄ノ練習〔筆・胡弓合奏〕

〔筆・山勢松韻、鳥居忱、胡弓・林蝶〕

下等諸級生徒唱歌四種〔百拾五名〕

見渡せば〔箏胡弓合奏〕〔同上〕

春の弥生〔風琴〕〔メーソン〕

幼稚唱歌二曲〔進メ進メ、マストラヲ武士〕〔洋琴〕〔同上〕

上等諸級生徒唱歌三種〔九十一名〕

うつくしき我子〔風琴〕〔メーソン〕

閨の板戸〔同〕〔同上〕

墨田河原〔洋風管絃合奏〕

右終テ退出〔洋琴進行曲〕

午後二時半、音楽取調掛伝習人奏楽

洋琴六曲

独弾曲 四曲〔鳥居忱、林蝶、加藤定、谷沢久良〕

二人聯弾曲 一曲〔千村筆、吉田キサ〕

三人合弾曲 一曲〔遠山杵、米田蝶、幸田延〕

午後三時

女子師範学校生徒進入〔本科七十九名、予科百四名〕

〔洋琴進行曲〕、音楽取調掛助教及伝習人之ニ合ス

単音歌唱 三種

五月ノ風〔洋琴〕〔メーソン〕

鏡ナス〔同〕〔同〕

燕〔同〕〔同〕

複音唱歌 一種

隅田河原〔風琴〕〔同〕

三重音唱歌 一種

薰ニ知ラルル〔風琴〕〔同〕

高等単音唱歌 二種

栄ユク御代〔洋風管絃楽器合奏〕

富士山〔同〕

右終テ退出

午後四時 休憩〔來客ニ茶菓ヲ供ス〕

午時四時半 音楽取調掛員山勢松韻等奏曲本邦俗楽等

新晒〔箏三味線合奏〕

〔箏・山勢松韻、三味線・加藤定〕

午後五時一同退散

〔音楽教育成立への軌跡〕四六七ページ——四六八ページ

シ

第二日のプログラムについては、これを省略するが、午後二時

にはじまった第二部の中に「学習院生徒唱歌〔百廿八名〕」が歌うものとして、次のように記されている。

「見渡せば〔箏・山勢松韻、胡弓・吉田キサ、加藤定〕〔同右書、四六九ページ〕

こうして「見わたせば」は、小学唱歌のひとつとして、私たち日本人の前に、その姿を現わしたのであった。 (つづく)

(国立音楽大学)

